



ヨーロッパ研究所
活動記録



上智大学ヨーロッパ研究所 活動記録 (2020年度)

10月22日、29日

講演会「東ティモール 歴史と現状」(2回連続講演会)

講師：青山 森人 (ジャーナリスト)

司会：市之瀬 敦 (当研究所所長、上智大学外国語学部教授)

11月18日

上映会『モルゲン、明日』—ドイツ市民のエネルギー革命

冒頭挨拶：坂田 雅子 (『モルゲン、明日』監督)

解説：木村護郎クリストフ (当研究所所員、上智大学外国語学部教授)

*Sophia Open Research Weeks 2020 参加

11月26日

講演会「ジェンダーの観点から読む世界文学 男たちが描いてきた女性像」

講師：沼野 充義 (名古屋外国語大学教授、副学長)

司会：出口 真紀子 (上智大学外国語学部英語学科教授)

(共催：科研費基礎研究 (B)「近代イギリスにおける感受性文学と誤認」)

代表：小川公代 (当研究所所員、上智大学外国語学部教授)

講演会「東ティモール 歴史と現状」
 日時：2020年10月22日(木)、29日(木)
 15:25~17:05

講師：青山森人 (ジャーナリスト)

司会：市之瀬 敦 (上智大学外国語学部 所長、上智大学外国語学部 専任講師、教授)

開催方法：zoomによるオンライン講演会

参加費：無料

対象：本学学生、教職員、一般

言語：日本語

事前申込：必要

第1回「東ティモール 歴史と現状」 10月22日(木) 申込み締切：10月20日(火)
<https://color.ac/sophia/events/zoom/20201022>

第2回「東ティモール 歴史と現状」 10月29日(木) 申込み締切：10月27日(火)
<https://color.ac/sophia/events/zoom/20201029>

【上映会】
 上智大学ヨーロッパ研究所主催

モルゲン、明日
 —ドイツ市民のエネルギー革命—

ドイツを目指す、脱原発・エネルギー転換を志す市民の行動力に焦点をあてたドキュメンタリー『モルゲン、明日』(監督：堀田雅子)の上映会。監督挨拶および解説(ドイツ語学専攻 木村護郎クリストフ)行う。

開催方法：zoomによるオンライン上映会

参加費：無料

対象：本学学生、教職員、一般

言語：日本語

事前申込：必要

日時：2020年11月18日(水) 17:20~19:00

申込み締切：11月16日(月)

申込み：11月16日(月) 申込み締切：11月14日(土)

申込み：11月18日(水) 申込み締切：11月16日(月)

<https://color.ac/sophia/events/zoom/20201118>

ジェンダーの観点から読む世界文学
 男たちが描いてきた女性像

Zoomによるオンライン開催

2020年 11月26日(木)
 17:20 ~ 19:00

沼野充義 (ぬまのみつよし) 教授

講師：沼野 充義 (名古屋外国語大学教授、副学長)

司会：出口 真紀子 (上智大学外国語学部英語学科教授)

開催方法：zoomによるオンライン講演会

参加費：無料

対象：本学学生、教職員、一般

言語：日本語

事前申込：必要

日時：2020年11月26日(木) 17:20~19:00

申込み締切：11月24日(火)

申込み：11月26日(木) 申込み締切：11月24日(火)

申込み：11月26日(木) 申込み締切：11月24日(火)

<https://color.ac/sophia/events/zoom/20201126>

1月9日

シンポジウム「スラヴ語・スラヴ文学の比較対照研究—第16回国際スラヴィスト会議への日本の寄与—」

パネリスト：

村田 真一（当研究所所員、上智大学外国語学部教授）

小椋 彩（東洋大学文学部助教）

伊東 一郎（早稲田大学名誉教授）

中島 由美（一橋大学名誉教授）

三谷 恵子（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

司会：

村田 真一

（共催：日本スラヴィスト協会）

1月21日

ワークショップ“Gedichte und Übersetzen – Lesung und Gespräch mit Versatorium”

ゲスト：Versatorium* から8名が朗読に参加（* オーストリアの社団で、文学作品を翻訳し、翻訳プロセスを理論的に検討する翻訳家、研究者、芸術家のためのプラットフォーム）

司会：Erich Havranek（当研究所客員所員、上智大学グローバル教育センター常勤嘱託講師）

【シンポジウム】主催：上智大学グローバル研究センター、共催：日本スラヴィスト協会

スラヴ語・スラヴ文学の比較対照研究
—第16回国際スラヴィスト会議への日本の寄与—

日時：2021年1月9日（土）14:00～17:00

■MC/司会 村田 真一（当研究所所員、本学外国語学部教授）
「スラヴのモダニズムとポストモダン」のコンパニオン・エッセイを学ぶための対話的セッション

小椋 彩（東洋大学文学部助教）
「スラヴのモダニズム」の巻頭をめぐって

伊東 一郎（早稲田大学名誉教授）
「スラヴ語のコンテクスト」に関する英語「英」の議論

中島 由美（一橋大学名誉教授）
「言語学と文学」の対話的セッション

三谷 恵子（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
「シマハインツの『20年』—スラヴ世界の『歴史』のアップデートの研究」

■司会 村田 真一

■開催方法 Zoomによるオンライン開催
※参加：必要分は、お申込み完了後、ご連絡いただいたメールアドレスにご案内いたします。

■対象 教員、大学院生

■言語 日本語

■要事前申込み（定員あり）下記URLまたはQRコードよりお申込み下さい。
申込み締切：1月4日（水）

<https://events.hosei.ac.jp/2021/01/09/>
※定員に達し次第、お申込みの受付終了とさせていただきます。

上智大学グローバル研究センター
〒100-8302 東京都千代田区千代田1-3-1
上智大学本館5階505号室 TEL 03-5228-2002
E-mail: icr@hosei.ac.jp

Eine Veranstaltung des Zergo-Instituts der Sophia-Universität

Gedichte und Übersetzen

Lesung von VERSATORIUM aus den Übersetzungen von Werken Roberta Dapuzis
sowie Gespräch und Diskussion über literarisches Übersetzen anhand der folgenden
Texte:

2021.01.21 (Do.) 17:20–19:00

■Gäste VERSATORIUM

■Moderator Erich Havranek
Visiting Fellow, European Institute, Sophia University

VERSATORIUM ist eine Plattform für junge
Übersetzer*innen, Wissenschaftler*innen und
Künstler*innen, die gemeinsam literarisch
übersetzen und den Übersetzungsprozess
theoretisch reflektieren.
Die Übersetzung von La terra più del paradiso
von Roberta Dapuzis wurde 2017 mit der
Übersetzungsprämie des Bundeskanzleramtes
Österreich ausgezeichnet.
Die Übersetzung von Le bestialità della malinconia
stand im Dezember 2020 auf der GRF Bestenliste.

■Online via Zoom / Zoomによるオンライン開催

■Sprache: Deutsch / 言語: ドイツ語 (通訳なし)

■Voranmeldung / 要事前申込み:
<https://events.hosei.ac.jp/events/2021/01/21/>
※ Anmeldeschluss / 締切日: 2021.01.19
※ Teilnehmer*innen erhalten nach der Anmeldung Texte,
die in der Veranstaltung besprochen werden. / 参加には、
ご連絡後、ワークショップで使用する資料のご案内を差し上げます。

■Kontakt / お問い合わせ: e.havranek@hosei.ac.jp (eul.konisch)
language@hosei.ac.jp (日本語)

European Institute, Sophia University
Bld. 100-1, 1st Fl., 1-3-1, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8302, Japan
Tel: +81 3 5228 2002
E-mail: icr@hosei.ac.jp

上智大学グローバル研究センター
〒100-8302 東京都千代田区千代田1-3-1
上智大学本館5階505号室 TEL 03-5228-2002
E-mail: icr@hosei.ac.jp

上智大学ヨーロッパ研究所主催講演会 概要



テーマ：「東ティモール 歴史と現状」(第一回、第二回)

講師：青山 森人 (ジャーナリスト)

司会：市之瀬 敦 (上智大学外国語学部ポルトガル語学科教授)

日時：2020年10月22日(木曜日) 15:25-17:05 (第一回)

2020年10月29日(木曜日) 15:25-17:05 (第二回)

本講演は外国語学部ポルトガル語学科「アジアのポルトガル語圏」の授業を兼ねて行われた。講師の青山氏と市之瀬教授の親交は1989年、ポルトガル語圏アフリカの独立という共通の関心から始まる。1992年頃より青山氏は旧ポルトガル領東ティモールに深く興味を持たれ、同地を頻繁に訪れている。30年近く東ティモール社会を見つめ現地の人々と交流して現状に直接触れられたご体験に基づくお話は、現地の人々が直面する複雑且つ厳しい現実を知る大変貴重な講演となった。

第一回講演では、東ティモール民主共和国成立に至る歴史をお話いただいた。

①～1975年までポルトガル植民地時代(日本軍占領を含む)

- ・複数の小王国から成るティモール島のポルトガル政治統治は18世紀初頭に始まる。1859年東ティモール(ポルトガル領)と西ティモール(オランダ領)の間に人為的境界線が引かれ、1896年東ティモールはポルトガル植民地支配下となった。
- ・1911-1912 外国(ポルトガル)支配に対する大規模な反乱マヌファヒ戦争。東ティモール人は戦争が終わった時、敵側に娘を差し出す伝統があり、20世紀のマヌファヒ戦争でもその伝統は残る。
- ・日本軍はティモール海の原油資源に戦前より目を付け、東ティモールをオーストラリアとの最南端絶対防衛ラインとし、第二次世界大戦に中立なポルトガル領東ティモールに侵攻・占領、オーストラリア戦の戦場とした。住民は二派に分断。同地の従軍慰安婦問題を日本政府は現在も放置。
- ・戦後、東ティモールはポルトガル植民地支配下にもどる。戦後間もなくは、反乱よりは服従の様相を呈し、他地域のような民族解放運動は起こらなかった。1959年6月ウアトラリの反乱/蜂起が勃発。関係者(500-1000人)はポルトガル軍によって公開処刑、拷問、強制労働、島流し等に処せられた。
- ・1970年代民族闘争萌芽。1974年4月25日ポルトガルの「カーネーション革命」をきっかけにポルトガル領アフリカ植民地が次々と独立。1975年11月28日フレテリン(FRETILIN: 東ティモール民族解放軍)が東ティモール独立を宣言。それに対し、隣国インドネシア、スハルト独裁政権軍が東ティモールに全面侵攻。ポルトガル軍は武器弾薬を置いて逃げ去り、東ティモールはその弾薬で抵抗したが、米カーター政権が支援する大インドネシア軍に大敗、インドネシア軍占領が始まる。

②1975年-1999年 インドネシア軍事占領時代

- ・1975年から1980年頃までの占領初頭に人口の三分の一の人々が、戦闘ではなく、

飢餓と病気によって死亡したと語り伝えられている。

- ・生き残ったシャナナ＝グズマンは、フレテリンを他政党、他勢力を包括する抵抗運動に構築、“全国民のための解放軍”に改編。1989年ローマ法王訪問の際に市民が東ティモールの窮状を訴えたことで、より多くの市民を取り込む本格的民族解放運動が始まる。
- ・1998年スハルト独裁体制が崩壊、1999年9月4日、国連主催のインドネシアへの帰属の賛否（または独立）を問う住民投票で独立票（8割）が圧勝。
- ・インドネシア軍（実際は現地東ティモール人兵組織）による報復が起こり東ティモールは大混乱。インフラ80-90%破壊、20-30万人が難民となる（事実上は西ティモールへの強制連行）。1999年9月20日オーストラリア軍を中心とする多国籍軍が東ティモールに上陸、1999年10月31日インドネシア侵略軍が撤退。

③ 1999年10月31日-2002年5月20日 国連暫定統治時代

- ・国連安保理によるUNTAET（国連東ティモール暫定統治機構）による独立国家の基礎作りが始まる（未完）。不透明な国連統治はこれまで一体となっていた指導者と民衆の間に溝をつくり、人々からは笑顔が消え、独立への高揚感は薄れた（インドネシア支配によって受けた傷に次ぐ第二のトラウマ）。
- ・2002年5月20日、東ティモール民主共和国成立。21世紀初の独立国。（11月28日「独立宣言の日」（1975年）、5月20日「独立回復の日」（2002年）が国民の祝日となる）
- ・公用語問題：独立運動の指導者はポルトガル語を話すエリートであり、ポルトガル語の公用語化は当然。一方インドネシア占領下現地語で育った若者はポルトガル語を解さない。シャナナ＝グズマンはポルトガル語がインドネシア占領時代から話されていないことを承知の上、ポルトガル語と現地語の一つであるテトゥン語を公用語に採用。現在も大多数はポルトガル語に反対の姿勢であり、公用語政策は教育水準向上の足かせとなっている。

第二回講演では、10年で枯渇が予想されている石油への経済依存体質からの脱却が迫られながらも、政治的袋小路に陥る東ティモール民主共和国の現状についてお話いただいた。

④ 東ティモール民主共和国の現状

- ・首都ディリ（Dili）、岩手県サイズ、人口推定120-130万人、通貨は米ドル、主産業はコーヒー、経済は石油・天然ガス油田のロイヤリティに過度に依存（資源の呪い）。
- ・公用語は32言語（国勢調査）中ポルトガル語とテトゥン語。インドネシア語、英語も重要な言語。
- ・191番目の国連加盟国。CPLP（ポルトガル語諸国共同体）加盟国、2014年議長国、ASEAN（東南アジア諸国連合）加盟を目指す。西サハラ・パレスチナに連帯。
- ・政治制度：65議席一院制、任期5年。セミ大統領制。

2002年-2007年 フレテリン政権（シャナナ＝グズマン大統領、マリ・アルカティリ首相）

- ・2004年5月、国連は東ティモール政府に治安維持全権を委譲、国連軍は徐々に撤退

するかと思われたが、2006年4月首都ディリを中心に東ティモール危機勃発、オーストラリア軍によって収束。2006年8月から2012年12月までPKF（国連平和維持軍）駐留。

- ・2008年2月11日、反乱軍兵士による首相、大統領同日襲撃事件が勃発し、皮肉にも東ティモールは国連軍に頼らない、自らによる治安回復に目覚め、治安は急速に回復した。「さらば紛争、ようこそ発展」をスローガンに石油基金による大規模基盤整備着手。「さらば紛争、ようこそ汚職」へ。

2012年-2017年 シャナナ＝グズマン（フレテリンを含む）大連立政権（タウル・マタン・ルアク大統領、シャナナ＝グズマン（-2015）およびルイ・マリア・デ・アラウジョ首相（フレテリン）、2017年-フランシスコ・グテレス・ルオロ（フレテリン）大統領、マリ・アルカティリ首相

- ・CNRT 内部分裂から始まる「政治的袋小路」が続く、2018年5月、前倒し選挙、CNRT、PLP（大衆解放党）、KHUNTO（美しく豊かなティモール人の国民統合）連立政権。ルオロ（フレテリン）大統領、タウル・マタン・ルアク（PLP）首相。
- ・2020年3月21日新型コロナウイルスのため、非常事態宣言発令。
- ・フレテリン、PNP、KHUNT 対 CNRT（野党化）
- ・現在も出口の見えない「政治的袋小路」

ティモール海の天然資源をめぐるオーストラリアとの攻防（資源の呪い、国益、利権）

- ・東ティモールとオーストラリア間の領海画定（CMATS）はインドネシア占領時代（1972年）に引かれ、ティモール島とオーストラリア大陸の中間線よりティモール島寄りである。
- ・2017年 CMATS 無効合意、「領土はすでに解放した、次は領海の番だ」（東ティモール交渉団長シャナナ＝グズマン）
- ・東ティモール領海の“400億ドルの収益が見込まれる”「グレーターサンライズ」ガス田（東ティモール国営GAP社56.56%、ウッドサイド社（豪）33.44%、大阪ガス社10%）からのパイプラインの行先は未決着（国連海洋法条約に基づく）。

この記録は、当研究所研究補助員が講演会当日の録画データに基づき内容をまとめたものであり、記された内容は報告者の発言内容とは細部で異なる場合がございます。なお、本講演会で表明された見解は全て個人的なもので、必ずしも上智大学や当研究所を代表する見解ではありませんので、ご理解・ご了承下さいますようお願いいたします。

上智大学ヨーロッパ研究所主催上映会



テーマ： 「モルゲン、明日」ードイツ市民のエネルギー革命

冒頭挨拶： 坂田 雅子（監督）

解説： 木村 護郎クリストフ（上智大学外国語学部ドイツ語学科教授）

日時： 2020年11月18日（水曜日）17：20-19：00

冒頭、木村教授は本映画上映の目的について説明した。

- ・ヨーロッパ研究所が東日本大震災以来行っているヨーロッパおよびドイツのエネルギー政策に関する企画の一つ。
- ・ドイツのエネルギー転換に至る社会的背景に着目したドキュメンタリー映画を通じて、ドイツエネルギー政策の実情を知る。
- ・ドイツ市民社会の特質を日本との比較を念頭に置いて鑑賞する。

坂田雅子監督冒頭挨拶

福島原発事故をきっかけに核の時代を問い始めた。原子力というパンドラの箱を開けてしまった人類。私たちはこれからどこへ向かうのでしょうか。福島の事故の後、この重大な警告を受けて日本の市民も立ち上がりました。各地で大規模な反原発運動が起こり、節電が始まり、自然エネルギーが動き始め、新しい時代がはじまるのか、という希望が湧いてきました。でも、事故後一年余りで原発の再起動の掛け声が始まり、事故の原因究明もないまま、福島は全て“UNDER CONTROLEだ”、というまやかしがまかり通るようになりました。

一方福島から一万キロ離れたドイツは事故の3ヶ月後には、2022年までに原発を全部止める、と宣言しました。私はメルケル首相の決断に感服しました。この違いはどこから来るのだろう、と私は不思議に思いました。二つの国は様々な点で共通しています。第二次世界大戦での間違った政策、敗戦、それに続く経済復興などです。でも、どこかで大きく道を分かちました。それはなぜなのかを尋ねて、私は三年間で五回ほどドイツに取材にでかけました。

日本で聞く話からはなかなか現実がつかめません。ドイツで再エネが進んでいるというと、典型的な反論は、ドイツはフランスから原発を買っている、汚い石炭火力を使っている、あるいは再生エネルギーは高くつくから先行きは知れている、というようなものでした。一方では、太陽光や水力発電、風力発電などで電力を自給し、売電までしているコミュニティもあるという夢のような話も聞かれます。実情を知りたいと思って、ドイツを縦横に4000キロも駆け巡り、都市で、学校で、村で、あるいは教会で、脱原発、自然エネルギーへ情熱を燃やして実践する多くの人々に出会ってきました。

太陽光、水力、バイオガスなど小さなコミュニティで市民が手作りの発電を行っている実態を観ました。シェーナウという小さな町では、市民が送電線を買って、自分たちの電力会社を作りました。自然エネルギーは着実に根付いていると思いました。それはどうして可能になったのでしょうか。出会った人々は口々に“私たちは戦争中に間違ったことをしたので、権威に盲目に従うことをやめて、自分で考え、行動することを大切にしています”と言います。ここに何かヒントがあるのではないかと思います。戦争への徹底的な反省、それがドイツと日本の違いではないでしょうか。

ドイツでも戦後すぐに民主主義が発展したわけではありません。それは1968年の学

生運動を待たなくてはなりません。これをきっかけに人々はナチスの過去と向き合い、あるべき社会の姿に向き合うようになったのです。そのあるべき姿の中には、反原発そして環境保護も含まれていました。1970年代にはドイツでもいくつかの原子力関連施設の建設計画がありました。そのなかの一つヴィールという小さな村で起こった反原発運動では主婦や農家の人々、それに学生たちが連帯して、原発建設阻止に成功しました。この成功が市民に抵抗する勇気を与え、その後のドイツ各地の反原発、自然エネルギー推進の動きにつながっていったのです。ヴィールで活躍した人たちは私と同じ年代、もう70を過ぎるぐらいですが、多くがその後も継続して環境問題、反原発運動に関わってきました。彼らの永年の粘り強い努力が実を結んだのです。

日本でも、私や私の仲間たちも1968年の学生運動の時代を経験したのですが、あの時の理想や情熱はどこへ消えてしまったのだらうと思うことしきりです。権威に服従しない、自分で考え、自分の足元から始める、過去に目をつぶらず、過去の反省から将来のあるべき姿を倫理的に考える。ドイツを脱原発に導いたのはメルケル首相の力だけでなく50年来のドイツ市民の草の根の運動があったからだと思います。日本でも私たちにできることはまだまだあります。小さな一歩が大きな変化に結び付くのです。ドイツの旅は、小さな私たちではありますが、その私たちが世界を変えることができるのだという勇気を与えてくれました。その想いをこの映画を通して皆様と分かち合えたいなと思います。「モルゲン、明日」は私たち一人一人が作るのだと思います。

では、みなさん、映画を楽しんでください。

質疑応答

Q：宗教関係者がなぜ繰り返し出てくるのか？

A：ドイツではエネルギー問題は教会において倫理という問題で議論されてきた。（ヨーロッパ研究所叢書第12号「ヨーロッパの世俗と宗教」2019年3月8日発行参照）

Q：ドイツは原子力エネルギーをフランスから輸入しているのではないか？

A：ドイツは再生可能エネルギー生産が増え輸出している。しかし、再生可能エネルギーは不安定であるため、フランスから輸入も行われている。

Q：再生可能エネルギー生産の不安定性について、

A：日本はベースロード（安定した火力や水力をベースとしたうえで、再エネを追加する）、ドイツは再エネをベースに残りを火力等に依存するという逆の発想。

Q：環境と経済のバランスについて、

A：日本では環境と経済は矛盾、対立。ドイツでは再生可能エネルギーに切り替わることで生活も豊かになるという発想。対立して考える発想をやめる。

他

この記録は、当研究所研究補助員が上映会当日の録画データに基づき内容をまとめたものであり、記された内容は報告者の発言内容とは細部で異なる場合がございます。なお、本上映会で表明された見解は全て個人的なもので、必ずしも上智大学や当研究所を代表する見解ではありませんので、ご理解・ご了承下さいますようお願いいたします。

上智大学ヨーロッパ研究所主催講演会 概要



テーマ：「ジェンダーの観点から読む世界文学」男たちが描いてきた
女性像

講師：沼野 充義（名古屋外国語大学副学長）

司会：出口 真紀子（上智大学外国語学部英語学科教授）

日時：2020年11月26日（木曜日）17：20-19：00

本講演は外国語学部英語学科「立場の心理学 — マジョリティーの特権を考える」の公開授業形式で行われた。沼野先生にはロシア男性作家が描く女性像を中心に、「立場の心理学」やご自身のご研究分野の一つである「アダプテーション理論」の観点と結び付けながらお話いただいた。

1. まず、文学の他ジャンルへのアダプテーションが行われている（映画化、パレエ化等）トルストイの「戦争と平和」が取り上げられた。

- ・男性中心主義であるトルストイにとって、女性は描かれる対象、欲望の対象であり、主体ではなく、バイアスのかかった存在。
- ・主人公ナターシャはロシア文学最大のヒロイン。リアリズム作家であるトルストイは作中ナターシャの二つのダンス（民衆的なロシアの精神を体現するような踊りと、ロシア貴族の華やかな社交界におけるアンドレイ・ボルコンスキー侯爵との華麗なダンス）を対照的に描く。

“渡り者のフランス女に育てられたこの伯爵のお嬢さんがどこでどうゆうふうにしていつ自分が呼吸しているロシアの大気の中からこんな雰囲気をも自分の中に吸い込んだらどうか。とっくの昔にフランスのパドシャールに駆逐されてしまったはずのこんなステップを彼女はどこで覚えてきたんだろう。ともかく雰囲気もステップも真似や習い覚えたものではない。まさにおじさんが彼女に期待してたロシアのものだった”。

これはトルストイが願ひ、託すロシアの女性像。ロシア文化史、ロシア音楽史の核心。

- ・エピソードではナターシャを“多産な雌”と描写するが、これは女性蔑視ではなく、女性への繊細かつ深い愛と読むことができる。

2. アレクサンドル・セルゲーヴィチ・プーシキン（1799-1837）の「エヴゲニー・オネーギン」について、

- ・恋多き男プーシキンの父方の先祖はアフリカ系である。ロシア最大の詩人がアフリカの血を引いている、つまりロシア文学の多国籍性多文化性を示す。
- ・「エヴゲニー・オネーギン」は女（タチャーナ）が男（オネーギン）に振られ、男が女に振られ、というすれ違いが繰り返されて円環が閉じられ、作品のプロットは永遠に完結しない。
- ・オネーギンが「余計者」というアンチ・ヒーロー、タチャーナが強くひたむきに生きていけなげなヒロイン。これはロシア文学の永遠のプロトタイプであり、その

後のロシア文学における男性像女性像に少なからず影響を与えた。

- ・田舎貴族の娘タチャーナが、オネーギンに女性主体の強い意思表示する場面が描かれている。(革命的)

3. トルストイの「アンナ・カレーニナ」

- ・女性ヒロインに一貫して焦点を当てた不倫小説。西欧文学において婚姻外の愛は西洋近代の恋愛観の源流。ロシア貴族社会における不倫の社会的制裁をすべて背負い込むアンナは鉄道自殺に追い込まれる。
- ・トルストイは創作過程で、アンナを軽薄で醜い罰せられるべき存在から、より魅力的な、美貌であるだけでなく、精神的にもより深みのある女性に変貌させている。
- ・一方、夫カレーニンは当初高潔な人間に描かれていたが、最後にはいやらしく、冷酷で、世間体ばかりを考える打算的な、愛を感じられない人間に変貌。
- ・巻頭エピグラフの「復讐するは我にあり」は、作者トルストイの意思に反して成長し魅力を持ち始めたアンナに“復讐”するのは、神のみであって、トルストイではないとする、トルストイのアンナへの共感と読み取ることもできる。
- ・村上春樹は短編小説「かえるくん、東京を救う」「ねむり」の中で「アンナ・カレーニナ」を登場させている。
- ・「アンナ・カレーニナ」はグレタ・ガルボ (1935)、ヴィヴィアン・リー (1946)、ジャクリーン・ビセット、ソフィー・マルソー (1997)、タチヤーナ・サモイロワ (1967)、キーラ・ナイト (2012) らによって数多く映画化。パレエも上演されている。

4. チェーホフ「小犬を連れた奥さん」

- ・「エウゲニー・オネーギン」(1825-1832)、「アンナ・カレーニナ」(1873-1877)、「小犬を連れた奥さん」(1899) は男の立場から描いた女性像においてつながっている。
- ・成就しない愛を演じた男女。プーシキンの時代、不倫は社会的に許されない、心を強く持ち、道を踏み外さない時代。
- ・アンナの時代は女性が情熱を自ら燃やし、禁断の不倫の道に踏み込んで行く。同時に貴族社会において女性の身の破滅を意味し、幸福を手に入れることはできなかった。
- ・チェーホフの時代、不倫が成就する可能性は高まる。主人公はこれからどうしたらよいのだろうか、と悩んで終わる。結論は読者に委ねる。

5. ロシア以外の男性作家が描く女性像

- ・ミラン・クンデラ (1929-、チェコ生まれ、フランス在)「存在の耐えられない軽さ」: 人間はみな同じようなものだ。人間には 100 万分の一の違いがある。その違いが重要なんだ。女も然り。
- ・村上春樹 (1949-) はセックスシーンの多い作家。女性の描き方に特徴。
- ・日本は男尊女卑と言われるが、世界に誇る文学の最高峰は源氏物語 (紫式部)、美術界においては草間弥生。芸術界の世界におけるトップは女性。

ジェンダーとは何か？という質問に、沼野先生からは、Gender はもともと日本語にはない文法的概念。日本で人間の性別についてはセックスという表現もあるが、ジェンダーという概念は歴史的社会的に構築されてきており、文学作品の中でジェンダーを考えることができる、とのお応えだった。

この記録は、当研究所研究補助員が講演会当日の録画データに基づき内容をまとめたものであり、記された内容は報告者の発言内容とは細部で異なる場合がございます。なお、本講演会で表明された見解は全て個人的なもので、必ずしも上智大学や当研究所を代表する見解ではありませんので、ご理解・ご了承下さいますようお願いいたします。

上智大学ヨーロッパ研究所主催
日本スラヴィスト協会共催シンポジウム概要



テーマ： スラヴ語・スラヴ文学の比較対照研究
ー第16回国際スラヴィスト会議への日本の寄与ー

パネリスト：村田 真一
(上智大学外国語学部ロシア語学科教授、日本スラヴィスト協会会長)
小椋 彩 (東洋大学文学部助教)
伊東 一郎 (早稲田大学名誉教授)
中島 由美 (一橋大学名誉教授)
三谷 恵子 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)

司会： 村田 真一

日時： 2021年1月9日(土曜日) 14:00-17:00

日本スラヴィスト協会との共催である本シンポジウムは Zoom 形式で開催された。冒頭、日本スラヴィスト協会会長、国際スラヴィスト委員会日本代表委員を務める村田教授より、パネリストと同協会の紹介がなされた。

国際スラヴィスト大会は1929年よりスラヴ加盟国の持ち回りで開催され、日本は1978年よりオブザーバー参加、1983年より正式に参加している。本シンポジウムは2018年にベオグラードで行われた第16回大会での発表に基づく研究報告である。次回2023年の第17回大会は初めてスラヴ圏外のパリで開催が予定され、日本には8名の参加枠が設けられている。日本の若い研究者の積極的な応募が呼びかけられた。

また、本研究報告は上智大学ヨーロッパ研究所の叢書として出版が予定されている。

発表1：「アダムとリリスをめぐるスラヴのモダニズムとポストモダンの戯曲におけるカーニバル・モチーフ」(村田 真一)

3人のスラヴ人作家：

- ー スワヴォーミル・ムロージェク (ポーランド、1930年-2013年)
- ー グレゴリー・ヤーロク (イスラエル在住ロシア人作家、1965年-)
- ー ミハイル・セメンコ (ウクライナ、1892年-1937年)

による、悪魔的(デモノロジー)な登場人物としてリリスが登場する戯曲のカーニバル・モチーフを通して比較演劇研究を行い、モダニズムからポストモダンへの移行や関係性に介在している要因を明らかにする報告がなされた。

発表2：「レーミゾフのゲストブック『黄金の書』をめぐる」(小椋 彩)

1877年モスクワ生まれのアレクセイ・レーミゾフは、革命後の1921年に出国、ベルリンを経由して1923年にパリへ亡命し、1957年にパリで客死している。本発表は2012年にパリからモスクワ博物館に移送された『黄金の書』と呼ばれるレーミゾフのゲストブック(7冊)の調査結果を中心に行われた。1943年に最愛の妻を亡くし、孤独なイメージの亡命作家レーミゾフであるが、亡命中であっても出版活動を精神的・物質

的に支える友人、その家族、米川正夫を含む世界の芸術家らとの様々な暖かい交流があったことが報告された。

発表3:「スラヴ＝バルカン・フォークロアにおけるアレゴリー「死＝結婚」(伊東 一郎)

スラヴ＝バルカン・フォークロアにしばしば出現する、死を結婚と見立てるアレゴリーの比較分析報告がなされた。戦場における兵士の“死＝結婚”というメタファーは、洗礼に始まり、結婚、そして死というキリスト教世界の普遍的な世界観をパラレルで表現する：

- ロシアでは、既婚兵士が自らの戦場の死を、“剣”、“銃弾”、“墓”(何れも女性名詞)などを“娶った”、というメタファーで遺される妻にこれからの人生の自由を伝えた。
- ウクライナでは、独身コサックが“剣”、“墓”、“黒い大地”との“結婚”を母に遺した。
- バルカンでは、広範にわたって独身の死はよくないとされ、独身男性の死は婚礼衣装で葬る伝承がある。

個人の死＝終末であると同時に、フォークロアに表れる集団の死＝ステージの変化、というパラレルも表現する。

発表4:「言語地理学的地図作成から言語史再興へ」(中島 由美)

マケドニア語とブルガリア語において格変化の全体像は崩壊している。マケドニア語には人称代名詞に直接目的(旧対格)と間接目的(旧与格)の区別があり、それぞれに長形と短形が存在し、これらを二重使用することで、誰が、誰に、といったコミュニケーション上の間違いが起きない工夫がされているのではないかと考えられる。一方、ブルガリア語の人称代名詞長形はアルカイックに残存するだけで、現代語では前置詞によって意味の区別がなされている。

本発表は、マケドニア語方言における人称代名詞の用法の違いを地図上にコーパス化し、当該地域の言語構造変化に人称代名詞の二重使用が直接関わっていると解釈できる可能性を提示した。

発表5:「『シャハイシャ王の12の夢』—スラヴ世界の“孤児のアポクリファ”の研究手法」(三谷 恵子)

“孤児のアポクリファ”である『シャハイシャ王の12の夢』の原典、起源の所在、スラヴ世界への伝達経路、伝達系譜解明の研究手法が示された。このテキストの写本は19世紀に初めてロシアで発見され、その後もロシア、南スラヴ世界で写本が複数発見されているが、スラヴ語圏以外で類似のテキストは存在していない。本発表は、写本の内容、言語の時代、語法、書き換え等の比較分析によって、先行研究で明らかにされたステンマに新たな写本の位置づけを追加提示した。

この記録は、当研究所研究補助員がシンポジウム当日の録画データに基づき内容をまとめたものであり、記された内容は報告者の発言内容とは細部で異なる場合がございます。なお、シンポジウムで表明された見解は全て個人的なもので、必ずしも上智大学や当研究所を代表する見解ではありませんので、ご理解・ご了承下さいますようお願いいたします。



2020

上智大学ヨーロッパ研究所